

韓国の名詩①

서시(序詞) / 윤동주 (尹東柱)

죽는 날까지 하늘을 우러러
死ぬ日まで空を仰ぎ

한 점 부끄럼이 없기를
一点の恥辱がないことを

잎새에 이는 바람에도
葉にそよぐ風にも

나는 괴로워했다
私は苦しかった

별을 노래하는 마음으로
星をうたう心で

모든 죽어가는 것을 사랑해야지
全ての死に行くものを愛さなければ

그리고 나한테 주어진 길을
そしてわたしに与えられた道を

걸어가야겠다
歩いていかなければ

오늘 밤에도 별이 바람에 스치운다
今宵も星が風に吹き晒されて泣く

<単語・文法部分解説>

우러러보다: 仰ぎ見る、見上げる

부끄럼: 부끄러움の短縮形。形容詞부끄럽다 (恥ずかしい) の名詞形

잎새: 葉

일다: ①自然現象や揉め事が起こる、生じる ②栄える、興る ③沸き立つ

ㄹ不規則活用は、現在連体形時には、ㄹ脱落現象が起こる。

例) 알다 (知る) の現在連体形は아는となり、아는 사람で知ってる人の意味になる

괴로워하다: ①苦しむ、悩む ②面倒くさがる

아/어 야지: ~するべきだ、~しなけりゃ

주어지다: 与えられる、提示される

아/어 야겠다: ~ねばならない

스치운다: 스킨다 (①かすめる、触れる ②考えがよぎる ③視線がかすめる) + 올다
의 간편체 (簡便体)

この詩は韓国の詩人尹東柱 (尹東柱)の「空と風と星と詩」の中の「序詞」で、尹東柱は戦時中の1942年に韓国から日本に留学、同志社大学文学部に在籍。

その間のハンゲルでの作詩活動に対して、祖国の独立運動、及び反戦活動の嫌疑をかけられ、下鴨警察署に逮捕、後に福岡刑務所に移送され、終戦を僅か6ヶ月後に控えた、1945年2月16日に27歳の若さで獄中にて死亡。

没後50年を記念して、この崇高な韓国の詩人の、理不尽な若き死を悼み、同志社大学今出川構内にこの詩が刻まれた石碑が1995年2月16日に建立された(現在は京都造形芸術大学高原学舎にも石碑があるとのこと)。

上のような悲劇がなぜ起こったかと言うと、当時は朝鮮の人々が自国の言葉である朝鮮語で詩を書くだけで、独立運動や反戦運動の容疑を掛けられて、拷問されるような時代であったということです。

その背景には、当時の日本政府が、朝鮮の名前を奪い去るのみならず(創始改名)、文化までも奪い去ろうとして日本式の文化を強要したり(神社参拝の強制)、朝鮮の文化の代表とも言える「言語」すら奪い去ろうとした植民地支配の過酷な実態があったのです(1905年に朝鮮を保護国にして以降、大規模な言語干渉が行われたが、とくに決定的だったのは1937年、日中戦争に突入した時に朝鮮においても強権政治を断行し、それまでの二言語併用策から「日本語常用」へと方針を転換して日本語を一方向的に押し付けた)。

私たちはいまいわゆる「韓流」ブームなどの影響もあり、思うように韓国語(朝鮮語)を勉強することが出来ますが、歴史的な事実として日本が朝鮮半島を植民地支配していた当時において、時の日本政府が朝鮮の民衆からその言語である「朝鮮語」すら奪い去ろうとしたという歴史的事実を、知らないではすまされないと思うのです。

そうした当時の日本政府の政策に抗して朝鮮語での作詩活動を続けていたのが尹東柱さんだったと言えるのかもしれませんが、彼としては朝鮮人として「自国の言葉で詩を書く」という、ごくごく当たり前のことをしていただけにもかかわらず、わずか27歳という若さで命を絶たれてしまったわけです。。

彼を初めとした、当時の朝鮮の多くの人々が命を賭してまで守り抜いたおかげで、こうして今も朝鮮語・韓国語が地球上に存在してい勉強できると言うこと。

その意味を私たちはかみ締める必要があるのではないのでしょうか？